めて、迷の衆生を救はんか爲めあり』と。少にしても已に斯の如き、『吾は末法の大導師とならん、吾は日本の大船とならん。』てふの大自覺を抱き玉へるなり。吾出家以來日尙淺く、研學未だ微薄なりと雖も、過ぎにし幾年春暮正に開けんとして二三の草客美花を伴ひ來たりし頃『吾は日蓮大聖人の御弟子とならん』『吾は信を探りて人生の眞義安心立命の境に入り飽までも活躍せん』との一朝の覺悟の下に、一家團欒の網を破し、山寺の窓に佛書を繙くの身となり、然して今や祖山が峯にかくも尊とき聖敎をたどるを得たりしあり。さらば、吾等は如何でか宗祖のあの光彩ある且は妙なる御生涯を六百有餘年以前の出來事として、只驚異の目を見張りつゝ過ごす事の出來得べき。飽までも献必的宗祖の爲めに、否佛陀の爲めに奉仕して、常在此說法の御記文を念頭に抱き、大上人を此の現身に來たらし、日々夜々に於て吾孤身に活けるに非らず、吾は大上人とゝもに活けるあり、この大信仰を保ち、天地に恥ぢるなく心明正大第二の宗敎家たる吾等の本務を全うし、過去六百有餘年の大上人の生涯を、此の現生活に輝かせて、大上人の末法々々々々と叫び給ひし、今世を大聖人の御精神の如く、向上さす可く、一大奮鬪を試みざる可からず。

人生と勞働

辻　芦洲

働け額の汗と壯者の日に燒るけた筋肉とは、惡魔を驅逐するの最良の神符なり。

人生此の世に於ける生涯は、大部分勞働の生涯と稱すべきなり。仕事を爲すは常人にありては世間普通の狀態あるなり。苟も人と呼ばるべきの價値あるものは仕事を好み且是を爲すに堪ふるものならざる可からず。總ての人皆忙はしく働けるにいかで我れのみ怠惰あるべけんや。怠惰なるものいかで能く社會の尊敬と體面と責任とを持續して永久に是を失はざることを得ん、勞働は最良の新

教育者なり。如何となればそは人を驅りて他物と接觸せしめ、依て以て世間の實相を了解する事を得せしむればあり。人若し古今の傳記を繙かば、最も價値ある人物は最も其の職業に勤勉に、最も其の研究に忠實に、最も其の企圖を遂行するに勇敢あるを見ん。勞働は實に價値あるものを得んとするに當りて必ず拂はざる可らざる代價なり。偉大なる人物は、不撓の勤勉と百折屈せざる堅忍とを以て能く其の光榮の地位に到達することを得たり人は假令如何ある天才を有するも、將た又生れながらにして如何に聰明穎悟あるも、此世に出でたる上は、其の必然の刑罰として、勞働することを免かるゝ能はざるものなり。然れども勞働は畢竟刑罰にあらずして快樂なり。セントオーガスチン曰く『世に勞働せずして暮らす程苦しきことなし』高潔偉大なる目的に其の一身を捧げ周到の用意を以て其の熟慮したる計畫に進み行く人は稱すべきかな』と。但し勞働の功果の最も著しく顯はるゝは、寧ろ人生の高尚なる方面にあり。見よ、怠惰あるものが是を蓄積する歳月の半ばにて十分なるにあらずや。サンスクリットの古諺に曰く、『幸の神は常に獅子の如く勇敢に立ち働く人にのみ附き隨ふものあり。己れが失敗の原因を只薄倖の故にのみ歸する人は到底薄志弱行のそしりを免るゝこと能はず』と。人生の障害、其の過半は、放逸疎惰の性質よりして起るものなり。怠惰は實に青年を誘惑する最大の危險なるが如し、或一種の青年には兎角仕事を爲すを厭ひ何事にても少し骨の折るゝことは是を爭ふて避くるが如き風あり凡そ如何なる人にても『汝は世の中に於ける無用の長物あり、汝は放蕩懶惰にして、漸次破滅に近きつゝあり。』などの言を甘受するものはこれあらざるべし。且それ何等の仕事をも爲さずして、安閑と歳月を徒費する人々は、殆ど人生の享樂を失ひつゝあるものと謂ふべし。彼の生涯は常に休日なるを以て、眞の休養の面白味を解すること能はず寢てゐて暮す者は決して事業をも爲したる例あきなり。一切の出來事は皆彼を度外視して電光石火

の如く走り過ぎ、彼を昏睡と孤獨との内に放棄し去りて、復顧ることあらざるなり。クラップロビンソンの言に曰く『通常懶惰と稱するものは、畢竟これ無意識的に己れの無能力を自覺したるものに外あらず』と。ジェレミーテーラーは曰く『懶惰は生存せる人の葬式あり。懶惰なる人は、世間の變遷とは何等の相渉る所あきが故に、神の爲にも將た人類社會の爲めにも何等の用無きものあれば、死したる人と毫も相擇ぶ所なし。彼は只害虫虎狼の類と等しく其の光陰を空費して、徒に地上の產物を食ふのみのものなり。斯くて時來れば、其のまゝ死に果つるのみ何等世上に貢献する所有らざるあり。彼等は鋤を握らず重荷を負はず、其の爲したる所の物は不利益のみ、害惡のみ、懶惰は實に此世に於ける最大の浪費なり』と。

古のギリシャ人は、夙に勞働は社會の目的を達する上に於て缺く可からざるものあることを主張したりき。

ソロンは曰く『仕事を爲さゞる人あらば、直ちに捕へて裁判所に送致す可し』と、又或西哲者曰く『仕事を爲さゞる人は盜賊なり』と。實に古の俚諺に曰へるが如く、懶惰なる頭腦は惡魔の仕事場也、何となれば人は何事をも爲さざる時は、動もすれば不善の行爲を考へ出すものあればなり。己は少しも仕事を爲さずして、而も己は仕事を爲す人間よりも以上ありあど考ふるが如きは、其の罪恕すべからざると同時に、又極めて憐れむ可きものなりと言はざる可からず。凡そ活動的盲目と放恣ある華奢との如く世に恐る可き物は有らず。自恣放逸は道德の基礎を危殆にし、人類社會の勇氣を阻喪せしむるのみならず、又生涯醫すべからざる幾多の苦勞を生み出だすものあればなり。惡魔は常に光明なる天使の如く粧ひて出現し、罪惡は常に快樂の假面を被りて其の誘惑を逞しうするものあることを知れる人は、世に最も善く知れる人と云はざる可からず。土耳其の俚諺に云へるあり『惡魔は怠惰漢を誘ひ、怠惰漢は惡魔を誘ふ』と。人若し懶惰の美しき僞の光に、誑かされて其の後

へに從ふときは放慾に續いて忽に亡滅至り、歡樂は一朝の夢と消へて、悲痛哀傷交も踵を接して迫り來たらん、豈畏れざる可けんや。かせぐに追付く貧乏なし、奮鬪せざれば勝利なし。

延山の春曉

柳　緒　生

二日のまだほの〴〵とするに、急ぎ床を離れ洗面などするに、日輪はすでに東に輾り出でんとす其の金色の春光、次第に強く、朝霞に包まれし四方の山、鈍き鉛白色の奥之院、見る〳〵透きとほり、今や東山は薄き桔梗色の光を帶び、其の清麗言はん方なし。未だ霞に閉せる庭の櫻花、彼方よりきこゆる讀經の聲、濃霞の裡に眠る鶯谷には、老の鶯のそれにも似ず、恥しげに二聲三聲法ー法華經！春の女神の佐保姫が、たくみの美、賤敗の吾れに新しき希望を與へ、靈しき光明、胸に復活の生命を與ふ、噫偉大なる哉春の曙。

本院内諸堂案内記

山　内　慧　戒

菩提梯を登りて天門に達し、正面の赤い御堂は祖師堂である。左の空地は本堂建設地。彼の向ふの高き峯は思親閣の靈塲身延奥の院である。登口に老杉一本屹立して居る下卒塔婆の行儀能く建てる塔塲所と云ふ。轉回して後方に見へる嶺は、鷹取山である。祖師堂に一禮し右折して進めば右に小さきトタン葺きの屋根は、鶯谷寮とて祖山學院生の寄宿舍と教塲の一部。左方小高き處の白壁の堂は、宗祖の御眞骨堂。其の前は拜殿である。其れより釋迦堂、納骨堂と並び、正面大玄關に鳳凰の彫刻ある棟は大客殿にして、其の次に建てるは法喜堂である。此堂内に這入つて、事務所より開扉の札を戴き、客殿の龍の間、松の間、千疊敷、正面の額鎮國道塲は大宰府宮小路康文氏の筆、床上の軸南無妙法蓮華經は支那人某の筆、左折して往けば納骨室に到る。三寶諸尊の兩脇に安置せるは